

自然科学の「利用者離れ」

自然に親しむことと、自然科学に親しむことは同じでない。人が自然現象に対峙したとき、それはなぜかと思い、その現象の未来はどうなるかと考えないと、自然科学にならない。たとえば、古代から発展した天文学により、春分、夏至のような太陽の運行を示す時刻、あるいは月の満ち欠けのような時刻を、われわれは何十年も先まで予測できる。

あたりまえのことだが、自然科学は自然を前提としている。しかし、自然から離れた、あまりにも人為的な自然科学が20世紀に生まれたように思う。塩素原子を含んだ化学農薬がもたらした、トンボや蝶の飛ばない「沈黙の春」は、その代表的な例だろう。

この随想でしばしば触れるように、人が大都会に集中して自然から半ば隔離されたとき、自然科学は自然から発想されたように見えない。自然科学は「理科」という教科として子供達に導入されるので、私が体験しなかったことだが、自然科学は教科書の上の出来事のように映るかもしれない。そうすると、そこに及ばずながら実感を与えるのは、親の子供時代の自然に対する経験に違いない。もし、親にその経験がなければ、子供達が「理科離れ」を起こすのは当然なのかもしれない。

自然科学を職業とする科学者や研究者にも、油断をすれば、「自然離れ」の危険が伴う。朝、建物に入ったきり、帰るまで実験室で仕事を続ける生活だと、自然を忘れてしまうかもしれない。比喩的だが、今日の天気が見える研究室の一枚の「ガラス窓」が、自然の感覚を取り戻させる。

視点を換えて人の歴史を振り返ると、人は道具を発明し、それを経験的に発展させて、いろいろなものを生産してきた。たとえば、食料であれば、麦、米、ブドウ、乳、大豆などを収穫し、それを加工して、パン、ビール、日本酒、ワイン、ヨーグルト、チーズ、味噌、醤油などを手にした。現在ではそれをバックアップする自然科学、たとえば微生物学や生化学が、厳然として存在する。このような状況下で製造された食品と自然科学の因果関係を、分かり易く消費者に説明する必要性が、現代の問題として指摘されている。研究者は、「自然離れ」のほかに、「利用者離れ」をしてはいけないのである。

随想「化学と生物の里山へキマグレ散歩」も、その全てではないが、自然科学の「自然離れ」や「利用者離れ」に想いをはせている。
